



園だより

平成28年1月12日
佛教大学附属幼稚園

新年あけまして おめでとうございます。

あかり

園長 藤堂俊英

トーマス・エジソンがフィラメントの素材に京都石清水八幡宮の竹を使い、白熱電球を世界中に広めてからおよそ135年。人工照明の光は地上から暗闇を次々に追放して行きました。電球が普及する以前、人の暮らしにあかりを提供していたのは、ひとつにはロウソクでした。最近ロウソクの光に頼ることはほとんどありませんが、それでも、お誕生ケーキや祈りを捧げるときには、ぬくもりを感じさせるあの光が今も使われます。夜のライトアップには、わざわざあのロウソクの揺らぎを真似た照明の工夫がなされています。この前、そのロウソクを主人公にした林木林（はやしきりん）さんの『あかり』という次のような絵本を読みました。

大きなろうそくが作られ、それに初めてあかりが灯されたのは、女の赤ちゃんが生まれた時でした。そこにはおかあさんの、「このろうそくはね この子のしあわせをねがって わたしが つくったものなの ころにやさしいあかりがとまりますようにって」という願いがこめられていたのです。その次に灯されたのは1歳のお誕生日の時でした。月の明るい夜に灯された時には、「自分がとてもちっぽけにおもえてなりませんでした」嵐の夜に灯された時には、荒れ狂う海を照らす灯台の光のように、「わたしの火もあんなにカブよいあかりになれば そうしたらどんなにこの子をはげましてあげられるかしら」と思いました。一足早く木枯らしがやって来た夜には、女の子が「わたし ろうそくをともしたいわ!」といて灯してくれたあかりで、家族が身体を寄せ合うと不思議と暖かくなりました。「さいしょは しあわせなときをてらすあかりだったのが いつしかつらいときによりそうあかりになっていました。」

「すきなひとができたとき、いきるってなんだろうとかんがえたとき ちいさな炎はいっしょになやんだり よりそってくれたのです」。やがて女の子は大人になり家から出ていくことになりました。女の子がそっとかばんに入れてくれたろうそくは、新しい家族を照らしながら、段々小さくなっていき、やがて箱の中にしまわれ使われなくなりました。

長い年月が流れ、次に箱のふたが開けられた時、女の子はおばあさんになっていました。彼女はろうそくに、「ころのいちばんおくまでとどくあなたのあかりにまもられて、どんなにころづよかったことでしょう」と語りかけます。それを聞いてろうそくは、過ぎにしかたを振り返って思うのでした。「わたしのともす小さなあかりをだいじにおもってくれるひとがいた。うまれてきてほんとうによかった」と。

人のころの揺らぎのように炎の光を揺れ動かすろうそくの火。なぜか人工照明の光にはないぬくもりや親しみを感ずります。それが今も私たちの暮らしの要所で使われる所以なのかもしれません。照らせる範囲は広くなくても、そんなに明るくなくても、揺れ動く人のころに寄り添い、その周囲にささやかなあかりとぬくもりと、時にはころの一番奥まで届く希望を提供してくれるろうそくのあかり。そのようなろうそくのころを道しるべとしながら、この一年を過ごして行きたいとおもいます。

